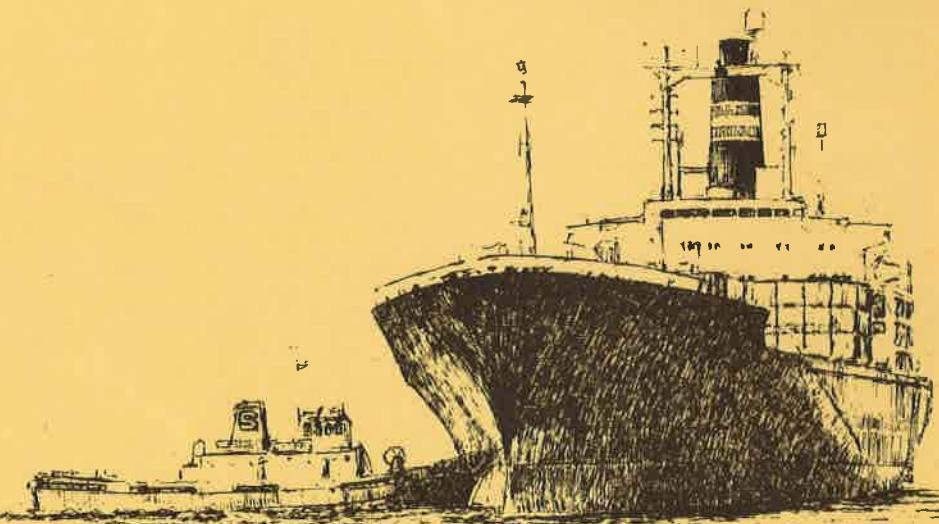


月刊・ブルーアンカー

# Blue Anchor



第15号

海文堂書店 1983・5 [15]

〒650 神戸市中央区元町通 3-5-10  
(電)

## 目

## 次

中国残留日本人孤児に寄せて	川北奈加
Gメン生活夜話	井上 豊
私のふるさと 屋島	2
—「歴史の旅・瀬戸内」 杜山悠著	
秋田書店 — 友沢 うらら	
偕成社の偉人伝	
1970/11/25	
植村 達男	
たんざく	
つつみたかひこ	
ぶつく・えんど	
郷土誌の窓	
海文堂案内板	
29	24
21	19
16	14
10	6
2	

# 中国残留日本人孤児に寄せて

川北奈加

中断されていた中国残留日本人孤児の親探しが今年になつて再開され、連日マスコミにとりあげられて、悲喜交々の親子対面風景がくりひろげられ人々の関心をあつめている。

孤児たちは男も女も中国風のお揃いの紺の制服のような地味な服装で、昔のお百姓を思わす朴訥で質素な顔ばかり。こんな純真な中国育ちの人的好さそうな孤児たちが、現在の日本に帰ってきて仕合せを掘んでくれるだろうか、心配である。

彼らは日本も日本人もよく知らないまま、親のいる祖国なるが故に、経済大国ゆえに、祖國にユートピアを夢みて帰国しようとしているかに思えて私は不安を覚えずにはいられない。

どんな家に住んでいましたか、附近の様子を覚えてい

ますか、別れたときのことを覚えていましたか、そのときあなたはどんな服をきていましたか、服の色とか模様など覚えていることがありますか？

係り官のたたみかける質問に、孤児たちはおぼろに震んだ幼時の記憶を辿りつつ、一つ一つ真剣な表情で答える。

どこかで自分のことばを、耳をすませて聴いているであろうみぬ親に向つて、必死に訴える。

「私のママー、どうか私を想いだしてー。思いだして会いにきてください」

ママーと呼びかけるとき孤児の目から涙が噴きでる。幼ない自分を異国に捨てていった親に対する恨みの翳かけらもみえない。

こうして、慕いつづけてきた親に会えて夢見る思いで抱きあい、泣きながら親の目にあふれる涙を見て、ハンカチでやさしく拭う光景を私は幾度かみた。

捨てられていた児なればこそ、わが親大事の心も人一倍のものがあるのであろう。

不幸にも、求めつづけてきた親がすでにこの世になく、

墓を抱いて頬ずりし「ママー」と叫び泣く孤児の姿は、母子の立場こそ逆であるが謡曲「隅田川」と等質の母子の恩愛が織りなす悲の極みの感涙をみるものに催させる。そして、一方では名のりで親もなく、テーブルの上に俯伏して悲歎に泣き沈む孤児。

明暗をわける感動的な涙のドラマが、テレビの画面を通して強力な迫力で展開する。

近ごろこれほど感動の涙を流したドラマはみたことがない。

事実は小説を超え、よりドラマチックなドラマを演出し、みるものの魂を抉る。

しかし、三十八年前の幼ない孤児たちは、いまは孤でもなければ児でもなくなっている。

それぞれ妻や良人をもち、子たちもある一家の主人であり、主婦となっている。

彼らを迎える親たちも現在は七十前後の老人で、殆ど隠居同様の人たちが多い。

孤児たちを招びよせて日本に永住させるにしても、孤児は中国人の養父母に育てられ、中国の教育をうけ、中

国人の連れ合いをもち、言葉はもとより日常の生活習慣などすべて準中国人であることを、両親や兄妹たちすべてが十分認識し、寛容な精神で理解した上でなければ、帰国した孤児たち一家の将来の仕合せや平和な生活は得られないと思う。

三十八年間という長い空白の歳月は、孤児問題を大変複雑なものにした。

孤児が孤児のまま単身、働き盛りの壯年の親のもとに帰り、一つ屋根の下に、「息子よ」「娘よ」と素直に喜んで迎え入れられた日は遠く空しく去つた。

身の上に変化があったのは孤児サイドばかりでなく親の身の上にもあった。

再婚して、名のりたくても名のりでられぬ氣の毒な親がかなりいるものと思われる。

それとは知らず会えぬ親を求めて泣き入る孤児。

その映像を、子にまさる苦しみを味わいつつ、泪滂沱、断腸の思いで凝視している。名のれぬ孤児の親がどこかに必ずいる筈である。

名のれぬ親と子は、生きている限り、互いの幻を追い

求めて哀しみの尽きる日はないであろう。

し度いものである。すべての日本人の誇りの名の下に。

中国及び中国の養父母は大国の大度をもって三十八年間、日本人が棄てた孤児を今日まで養育してくれた。

日本及び日本人はこの機会に、中国や中国の養父母たちに心からの感謝を以て、帰国を希望する孤児たちをあたたかく祖国に迎え入れ、せめて後半生を父祖の地で幸せに過ごさせてやるべきである。

国の犠牲になつたわれわれの不幸な同胞たちに、かりそめにも、中国の方がよかつた、などといわせぬようにしなければならぬ。

私も中国でしばらく生活して知つているが、中国育ちは純真で、欲がなく、人が好い。昔から孝道を第一の美德とする國柄故、親思い兄妹思いの心やさしい息子や娘たちである。

こんな孤児たちが憧れの祖国に帰つて、馴れぬ生活や理解のない人たちに傷つけられることも多かるう。

自分たちが生きた時代の悲劇の歴史を、自分の手で讀すことのないよう、すべての孤児が幸せを得るハッピー

エンドの物語りとして、残留日本人孤児物語を後世に遺

と同じように、親たちも異国に置いてきた幼な児を思つて夜も眠れぬ幾歳月を過ごしてきている。

血をわけた親子の恩愛の絆は、距離や歳月を超えて互いに求めあい、結びあわねばいられぬものである。

最後に、孤児たちに一言いつておきたいのは、実は私も丁度同じ敗戦の混乱期中国から子連れで引きあげてきた経験者の一人として、あなたを捨ててきた親たちは決して、幼ないあなたがいては逃げる足手まといになるから捨てたのではない、親とともにいてはいつ死ぬかわからぬ危険の迫った状況のなかで、子どもだけは助けてやりたいというわが子を思う親の哀切な願いから、已むをえず置いてきた親の真意を、どうか誤解しないようにしてあげて欲しい。

わが子を預けたり、道に捨てたりしたあと自らは死んでいった親も多かったのである。

また、子を預けた中国人の家に、無事に帰国した親たちが、その後子を案じて幾度も遠路を訪ねていっていることからも親の気持ちはわかつて貰えると思う。

捨てられた子よりも、捨ててきた親の苦惱、哀しみはより深刻である。

あなたたちが生みの親を一日も思はぬ日がなかつた、



# Gメン生活夜話

第五管区海上保安本部

井上 豊

Gメンー

GOVERNMENT・MENの略。すなわち、官吏あるいは政府支持者とある。

世間では海上保安官のことを、「海のGメン」というふうに呼ぶことがある。が、正式な組織ではない。

日本国政府には、現在、どの省庁にも「Gメン」という肩書きの機構は存在しないのである――。

「海のGメン」という言葉が世間に流れはじめたのは、昭和二十九年頃からだという。

少年雑誌やテレビドラマで見る颯爽としたあの制服姿に憧れたものだ。が、それは実に少年的な憧れであり、単純というか純粋な思いだったに違いない。

しかし、現実は決して、そんな思い通りの格好いいも

のではない。

大都会の人間社会は虚勢と虚構のうず巻く舞台だ。海のロマンなどという感傷的な言葉も、海上保安官には無縁だ。ある意味では、そこに入間の真実があるのかもしれない。

昭和三十九年十月、東京オリンピックの年である。舞鶴の海上保安学校を出た僕は、大阪海上保安監部に赴任した。海のGメンとしての第一歩である。

卒業式の席で校長の訓示にあたった「不撓不屈」「人愛正義」という言葉を心の片隅に、襟に付けた金色の階級章が自分ながらに厳しく思えた。

今に続く十九年間の海上保安官生活。悠久の時の流れた垣間見た僅かなかかわりではあるが、自分自身の人生にとつても、それはまた、貴重な日々なのだ。と同時に、「事件」というひとつ現実を通して、その蔭で揺れ動くさまざまな愛や憎しみや哀しみ喜び、そんな人生の葛藤を目にするのである……。

海上保安庁法第一条

海上において、人命及び財産を保護し、並びに法律の

違反を予防し、捜査し、及び鎮圧するため、運輸大臣の管理する外局として海上保安庁を置く――。

つまり、海上保安庁が担当する仕務は保護と法律の執行。終局的には、助けることと捕まえること。

攻と守りであるといえよう。

犯罪の強制捜査が攻であるのに対し、遭難船の救助は守りの仕務である。

守りの仕務は攻のそれに比べて地味だ。

怒濤の海に針路を向けるとき、これほど憂うつなときはない。

これが本音だ。人間としての偽らざる心境ではないだろうか……。然しそれは極く個人的なものの考え方なのかもしれない。

が、正直な話、船酔いするのでは、という心配が脳裡を襲う。吐気がする。因果な商売だとつくづく否になることもある。人間だから。

他人を助ける前に自分との闘いだ。救助に向う男達にあるのは、一途の信念、ただそれだけである――。

出航すれば、あとはもう無我夢中だ。そして、ふと我に返った時、無上の感激とも感動ともつかない思いが体内を伝走る。

『よかつた♪』

吐気も疲労も感じない。

精神的にも体力的にも限界をはるかに超越した気力の中での自己贊美である。

「救助」という一つの仕務を遂行した時、これほど爽やかな時はない。そこに、人間としての真実の喜びを得るのである。

常にそうしたパターンの繰り返しだ。だからといって、いつまでもその感激に浸っているわけにはいかない。海上保安官にとって、それは、多種多様な任務の一つに過ぎないのだ。

救助と全く逆なケースが「強制捜査」だ。救助に向う時のような合羽にゴム長ではない。制服、制帽に拳銃。私服の場合もある。

ブラウン管に登場するヒーローになつたような錯覚する覚えることもある。

覚せい剤、拳銃密輸、密航事犯——国際犯罪なら尚更だ。

おのずと心が逸る。逸る心を鎮めるのに躍起となる。が、一件落着した時、何んの感動も感激も噴出しない場合の方が多い。あとに去来するのは、人間社会の無情さだけである。

人間としての空しさが胸中を揺るがす。時として、自問自答することもある。

これも極く個人的な発想に過ぎない。

しかし、それが現実の姿だということは、まぎれもない事実なのである。

今から十七年前、昭和四十年六月下旬のことだった——日韓会談を境に急増する韓國からの密航者。正式調印

を一週間後に控えた間に、大阪関係管内でも既に三十三名が逮捕され、今まで十人の密航者発見の通報が大阪海上保安監部司令室に届いた。

午後八時。密航者が次々に巡視艇に移されている。

一瞬、僕の目が静止した。赤いブラウス、汚れたチエックのスカート、オカツバ頭の少女の姿だった。

その後から学生服の少年、そして少女……。

彼らが事務所に連行されたのは、九時半を過ぎていたらうか。手渡された折り詰め弁当をふるえながら開ける少女の頬に、一筋の滴がこぼれ落ちた……。

夢に見る母と風の便りに聞く父の姿だけを頼りにやつてくる。

「日本へ行きたい！」

一心の慕情を胸に、青春を捨て周囲のものすべてを捨てての命賭けの願望なのである。

「ひと目逢いたい！ 逢つて呼びたい、お父さん！ お母さん！」

「さん々と……」

日本語の参考書を持って渡りくる、わずか九歳の少女の気持ちなのだ。

自分が生んでくれた母に、父に……。人が生まれながらに持つ親子の情愛。

人が人に逢う、なんの汚れもない道徳的無色なはずのものではあるが、国の秩序を保守し、社会を維持する法律には通じない。

彼らにとって、父制社会の現代の世がさぞ恨めしいこと

とだろう。それゆえに、法の励行にあたるわれわれには憎悪の念を持つて見つめていることだろう……。

しかし、どのような事情であろうと法に背くものならば、たとえ世間から非難を浴びようと、又、情を詫されようとも、それを取締り、なくなることを願わなければならぬ。

七日目の朝、彼らは検察庁に送られた。

灰色でおおわれた雲の間から、梅雨の陽だけが淋しく彼らを見送っていた——。

母制社会に憧れをもつ者、それは現代社会からの逃亡者なのかもしれない。

そして、十数年前の過去の事件に固執する僕も又、Gメンとしての非情のライセンスを自から放棄した「はぐれGメン」なのかもしれない……。

# 私のふるさと屋島

—「歴史の旅・瀬戸内」杜山 悠著 秋田書店—

筆者の歴史のとらえ方は私を魅きつけた。

1

友沢 うらわ

滅亡平家一屋島・壇ノ浦合戦。目次を見て、このページを開くと、なつかしい写真ばかり。

数ページ目にはなんと、私の生まれ育った半島の写つた写真。下に「源平古戦場となつた東屋島の海」という解説があつた。

確かに、私の故郷は屋島のすぐ東隣の半島だ。屋島の三倍以上もあるその半島は、庵治と呼ばれ、屋島より少し海に突き出た、この半島と屋島との間の入り海が源平の古戦場だ。

十五年前に町制がひかれる迄は、庵治村であつた。

自分の育つた土地と目の前の海で源平の合戦があつた事を知つてはいたが、それを実感として感じたのは、この杜山悠著「歴史の旅・瀬戸内」を読んでからである。

遠い昔に、ここで、こういう事が、あつたというような淡々としたものではなく、史実とそれに関する人間一人一人を、浮き彫りにして行く。

あくまで実証的に書かれていて、義経の屋島進撃路の詳しい地図や、平家物語他の資料の引用。そして現在の船での所要時間などをもとにして、義経の動き方、平家側の状況などを推測して行く。

平家が安徳帝を中心とした大家族連れで、女、子ども、非戦闘員を多勢かかえた都ぐるみの引越部隊にすぎないのに較べ、源氏側は全員、戦闘専門の兵士であつたこと。

だからこそ、義経の小部隊による屋島急襲が成功したこと。

『屋島の合戦は二月の十九日から二十一日あたりが激戦の最中だったのか』と著者は述べる。旧暦の二月といふと、今の三月だ——春まだ浅い冷たい風の中、屋島と庵治の二つの半島の間の入り海で繰り広げられたであろう

戦は、いやでも現実味を帯びてくる。

その義経の歩いた道を私は歩いた。この本の著者の案内で、丹生山付近の山を二回歩いた時のことだ。

一回目は、清盛がひらいた丹生山参拝道（鳥原古道）であり、二回目は、義経道といわれる道である。その時の私は、殆ど歴史的な知識を持たないまま、仲間の後について歩いていただけだった。

この本によると、参拝道は清盛が福原京をひらくにあたつて叡山に模して崇敬を厚くしたと伝えられる摂播国境の丹生山明要寺への参拝道だとある。

古道を歩いたのは一月の末で、山の空気はしんと張りつめ、裸木の間から青い冬空が透けていた。

落葉の敷きつめた古道は山道にしてはかなり広く、輿を扭いで登れる道幅だと説明されて納得がいった。

義経道を歩いたのは、若葉の萌える頃だった。

平地から見上げる山は、まるで絵本のさし絵の山のように、だんだら模様に芽吹いていて、その色の多様さに驚いた記憶がある。

義経道には、わらびがあり、私達は義経が通つたかも

しれない道を、わらびをとりながらのどかに歩いた。

そして、この本を手にし、はじめて自分の郷里での源平の戦いに興味を覚えはじめた。

庵治の集落は、半島の先端近くの屋島側の入り江に密集している。

正面に、屋島が見える。

少し奥まつた入り江の一つは、昔から舟隠しと呼ばれていて、合戦の時、平家が軍船を隠したと言い伝えられている。

ここは長い間、舟隠し海水浴場と呼ばれる砂浜だったのが、やがて大きな観光施設になり、今ではある宗教団体の研修センターが建つてている。

何をつくつても長続きしないのは、平家のたたりだと言う人もいた。

子供の頃、この舟隠しの浜で、那須の与一にちなんで行事があつて、父に連れられて見に行つた記憶がある。海に小さな舟を浮かべ、それに女房姿の人が一人、片手に扇をかざして立つていた。

平家物語をまだ知らない幼い私にも紅白の衣装やきら光っていた扇は珍らしかつたらしく、今でもはつきり覚えている。

矢を本当に放ったものかどうかわからない。

危ないから、海へ向かって、舟から少し離れた方へ弓を射たのではなかつたろうか。

帰りに、みやげに貰つた矢を手にしつかり持つていたのだけは確かだ。

村には中学校までしかなかつたので、高校は高松へバスで通つた。今は海を埋めたて広い道路が走つているが、その頃は狭い峠道しかなく、バス一台通るのがやつとで、車が行き合ふと、どちらかがバックしなければならなかつた。

しかし、峠道から見える屋島との間に入り込んだ海は季節により天候により毎日色を変え、私はくねくね続く峠道をバスに揺られながら海を眺めるのが好きだった。

丁度、半島のつけ根のあたりのバス停に折り岩というのがあつて、那須の与一が「今一度本国へ帰さんと思し

召さば此の矢はづさせ給ふな」と祈つたとの言い伝えがある。その辺りは牟礼という町で、平家物語に「一日戰ひ暮し、夜に入りければ、平家の船は沖に浮び、源氏は陸に打上つて、群高松の中なる野山に陣をぞ取つたりける」（巻十一）とある。この群といふのが、今の牟礼の事だ。

余談になるが、今でも地の人が、浜と陸という風に「陸」という古い言葉を使うのを聞いたことがある。

屋島の壇ノ浦の合戦の後、志度の浦に敗退した平家は、義経主従八十余騎の急追を受けて、行方定めず漂ひ出たと平家物語にある。

この志度の浦というのは、今の志度湾のことであろう。志度湾は、ちょうど庵治の半島をぐるりと屋島と反対側へ回り込んだ所にある大きな湾である。

ここを二月下旬に出た平家の舟は、清盛の造つた敵島に参詣し、長門壇ノ浦に着くが、三月二十四日壇ノ浦の合戦で滅びる。

この本に出会うまでは、平家物語は古典であり、屋島の海は、ただの海でしかなかつた。その両方を結びつけ

る事が歴史だとすれば、その方法をこの本が教えてくれたのかも知れないという気がする。

4

帰省する時、私が一番好きな帰り方は、芦屋からタクシーで青木のフェリー乗り場へ行き、四時間十分の船旅を楽しんで帰る方法だ。

高松東港に着く一時間程前から、見知つた景色になつてくる。

やがて三十分もすると、船は庵治の半島の沖合いにさしかかる。

生家の裏山が見え、海辺のホテルが見え、海に沿つて走る道路が見える。車も人もよく知つてゐるものなら識別できる程の近さだ。

やがて船は、屋島の突端、長崎ノ鼻を回つて、屋島の西岸すれすれに港に入つて行く。

水際まで迫つた松の色を写して、海は緑濃く、朽ちかけた廃屋や、岸にうち上げられた流木がそのままにある。

長い間、私は過去の人間の生き様になど興味を覚えな

かつた。今、生きている人だけで十分だつた。しかし、過ぎ去つた時を生きた人も、今を生きている人も、時代は違つても、人間として生きるという意味あいにおいては、あまり変わりはしないのだということを、著者の語る歴史上の人々を通じて私は知つたよう思う。

# 偕成社の偉人伝

植村達男

小学校一年生の娘にせがまれて、ヘレン・ケラーの伝記を買った。出版社の名前をみると偕成社とある。私が小学校時代を送った昭和二十年代に度々お眼にかかった出版社の名前である。そして、しばらくの間忘れていた出版社名もある。

私は小学生時代、黄色いカバーのかかった偕成社の偉人伝を数多く読んだ。AINSTAIN、ノーベル、フォード、ロックフェラー、ディーゼル、マゼラン、パストール、高峰譲吉等の人物を思い出す。偕成社の伝記は、もつと色々と読んだ筈なのであるが、これぐらいしか記憶はない。

先に挙げた偉人伝は何れも父が買ってくれたものである。特にノーベル、フォードやロックフェラー、ディーゼル、高峰譲吉については父の意向が強く働いているよ

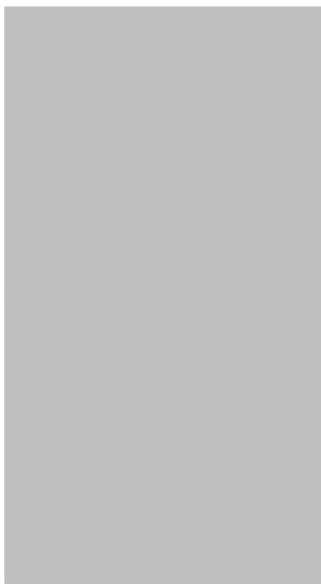
員として毎朝定時に出勤している。

今にして思うと、中堅サラリーマンとして人間関係等に苦労が多かった父は、このような苦労が少ない（と思われている）理数系への道へ進む可能性を息子である私に示してくれたのであろう。

うな記憶がある。私が子供のときに読んだ伝記が科学者、技術者、ひいては大富豪という共通項をもっているのは、どうも偶然ではなさそうである。

昭和三十年の夏、私たち一家は父の大坂転勤で、東京から神戸へ住居を移した。丁度その頃のことである。日曜日の夕暮、国鉄住吉駅から御影の自宅へ歩く道すがら、父は私に向って「大人になつたら、お金を沢山もうけよ。そうしたら、少しお父さんに分けてくれるか?」といった趣旨のことを云つたことがある。中学生の息子に対しても本気で、このような発言を父がしたとも思えないが、この言葉は、父が小学生時代私に買い与えてくれた伝記と奇妙な一致をみる。

父が期待（？）をかけた息子も、もう四〇歳となつた。父の期待に反して理科系の大学へ進むことを拒否し、父と同じく商大系の大学へ進んだ「息子」は、大発明や大富豪とは全く縁がないありふれた会社員の生活を送っている。また、七〇歳を過ぎた父も、自己の健康のためにもあるが、悠々自適の生活を送ることなく、現役の会社



# 1970/11・25

私は三島由紀夫で卒論を書いた。大学入学当時からそうしようと決めていた。三島が自決したその日から、いつかきっと三島への思いを自分の言葉でまとめてみようと秘かに思い続けてきたのだった。

村上春樹は「羊をめぐる冒險」で昨年野間文芸新人賞を受けた。

この話は、妻と離婚し「百パー・セントの耳」の女と同棲した「僕」が、靈能の「背中に星形のある羊」を探しに北海道の山奥まで出かけていき、そこで鼠という旧友に再会するというものである。

この本を読み出そうと何の気なしに目次に目をやつたところ、第一章は、

「1970/11/25」

であった。私は思わず、

「あっ」

と小さな声をあげてしまった。この日、三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊基地で自決したのだ。

思い出してみると、七〇年安保前後の事は子供のくせに鮮明に覚えている。第二反抗期に入り始め、社会への関心が芽ばえ出した頃に、一連の学生運動が起ったせいかもしれない。

一九六八年頃から私はお茶の水の東京医科大学病院で歯の治療を受けていた。学生運動が日に日に盛んになる中を、小学生の私は月一・二回の割でチョコチョコ通っていた。東大紛争の時、医科歯科大学は燃料基地になつていていた。病院の白壁には活動家が書いたらしいストラーガンが真黒に描かれていた。病院の外壁には投石防止用の金網が張られ、学生と病院側の対立がピリピリとした雰囲気として感じられるようになつた。そのうち入場許可書がないと病院の中に入れなくなつた。外来の受け付けは制限され出した。何かが起ころ。きっと起ころ。そしたらどうするのだろう……

一九六九年に東大安田砦は落ちた。水柱の中に誰も死なずに一つの戦いは終わってしまった。幼い私が想像していたような何かパアーッとした事は遂に起こらざじまいだつた。後に残つたものは喪失感だけだつた。

中学二年生の時、クラスで庄司薰の「赤頭巾ちゃん気をつけて」を読むのが流行つた。「赤頭巾ちゃん」も中学生の私には共感するところがあつたが、私の喪失感は十一月二十五日の三島の事件でなおさら強くなつた。

オトナ達は驚いてアレコレ言つていたが、私の喪失感を代弁してくれるような意見は一つも無かつた。私は三島を知る前に失つていたのだつた。

私は一九八〇年三月に大学を卒業した。三島の事件から十年が経ち、私は精神医学担当の福島章教授に三島の対人恐怖に関する卒論を手渡した。この十年かかって三島の小説、エッセーのほとんどを読み、彼に関する評論・精神医学的診断書も読んでいた。では、いったい何か私は揃んだかというと暗然とした思いに駆られる。結局何も分らなかつたが、これでやっと三島から足を洗うると思つたのだつた。「もういいんだ」という気持ちと自分の思いを充分には言い現わしかねた論文内容に対する未練とがごっちゃになつて、私は逃げるよう、福島教授の研究室を飛び出した……

「羊をめぐる冒險」の中で「僕」は三島由紀夫の事件を含めて、一九七〇年当時の思いを一つのムードとして語つている。それは村上春樹の「風の歌を聴け」「一九七三年のピンボール」にも通じる気分である。

海老原 明 美

世界中が動きつづけ、僕だけが同じ場所に留まっているるような気がした。一九七〇年の秋には、目に映る何もかもが物哀しく、そして何もかもが急速に色褪せていくようだった。太陽の光や草の匂い、そして小さな雨音さえもが僕を苛立たせた。

（「羊をめぐる冒険」 第一章 1970／11／25）

「羊をめぐる冒険」を読みながら、やっと今になってあの時十三才だった少女が感じた思いと同様の気分を持った人に出会えた気持ちがした。「僕」はそういった意味で、当時の私により近い存在である。

村上春樹の三部作には常に「失なわれた青春」「実らなかつた青春の夢」がある。1970年代を自分が主人公になれば、生きた一人の若者の悲しさがある。が、その悲しさは妙に乾いた抽象化された悲しさである。欧文を訳した日本語的な悲しさである。

村上春樹は三十三才と聞く。私より八才年上である。それゆえ村上春樹と私との一九七〇年代も実際のところ、

## たんざく

つつみ たかひこ

私が担当している文学グーン（日文、外文、詩、俳句、短歌、文芸評論）における、昨年の三月一日から今年二月末までの、売上動向を、当店のベストセラー情報をもとに、まとめてみよう。

はじめに、海文堂書店のベストセラー情報について、簡単に述べておく。

文庫を省く各分野の売上冊数の多い本を、各担当者に、毎週月曜日に提出してもらう。

これらをもとに、売上冊数の多い順に上位十冊を店内に公示し、あわせてその資料を、朝日、毎日、サンケイ各新聞社に提供し、活用してもらっている。

さて、最近の動向は、新書版等の手軽い本がベストテン上位に占める割合が多くなっている。

文芸書が一位になったのは、五十二週中九回しかない。

ムードとしても若干の隔たりがある。逃げてばかりいて、直視しようとなかった私自身の一九七〇年代であったが、そう思うと三島の事件を含めて私自身の一九七〇年代を語る余地はまだあります。

芦屋出身の村上春樹は現在私の町、船橋の住人である。

会いに行こうとは思わないが、何となく心温まる思いがある。



また、この一年間に十位以内に顔を出した作家は五十三人、平均すると一週に一人という、寂しい結果になってしまう。

もちろん、別表(一)の司馬 遼太郎氏のような、一人で十九回登場する超人的な作家（出度率三割八分）もいるが、全体的に見れば、文芸書は、ジリ貧の道をたどつていると、言わざるをえない。

『そなんでS。固いBUN学なんぞは、軽小短薄の現代には、合わないのでR。C7君、そう思わぬE?』と、嵐山 光三郎氏が、言つたとか……。（冗談）

さて、話が少し脱線したので、本筋に戻るが、別表(二)を参照して欲しい。

ほぼ実数に近い冊数を載せているが、読者の方は、この数字に対してもどんな感想をもたれるであろうか。機会があれば、是非、教えて頂きたいものである。

最後に、私個人として一言述べさせていただくなれば、このように売上本位で文芸書を見てしまう職業病によつて、私の眼は濁ってしまったのではないか。

こういう場合、例えば生田 耕作氏の文章『ビブリオ

マニア、と呼ばれる二本足の、羽のない生物がいる。書物と熱狂によって合成されたこの人間の一変種は……』等を読むようにしている。まさしく、心が洗われる気持ちになるからである。

どうか、私の担当する文学ゾーンから未知の若い作家が出現して、活字離れの若い人々に、文学を読む楽しみを与えて欲しいと望む毎日である。

別表1. 作家別ベストテン頻出度表  
(文芸関係のみ)

順位	作家名	頻度
1位	司馬 遼太郎	19回
2位	陳 舜臣	12回
3位	渡辺淳一	7回
4位	向田邦子	5回
4位	田辺聖子	5回
4位	城山三郎	5回
7位	有吉佐和子	5回
7位	官野澄	5回
7位	唐十郎	5回
10位	深田祐介他4人	4回

昭和57年3月1日～昭和58年2月28日  
(52週中)

別表2. 売上冊数ベストファイブ  
(文芸関係のみ)

順位	作品名	作家名	推定冊数
1位	菜の花の沖(一)～(六)	司馬 遼太郎	1000冊以上
2位	画本三国志シリーズ	陳 舜臣	500冊
3位	佐川君からの手紙	唐十郎	250冊
4位	最後の海軍大将井上成美	官野 澄	160冊
5位	裏声で歌え君が代	丸谷 才一	150冊

昭和57年3月1日～昭和58年2月28日(52週中)

ぶつく・えんど

文芸評論家の小林秀雄さんが三月一日に亡くなつた。その小林さんを敬愛し、小林作品を五十年間にわたつて収集している京都市伏見区深草野手町四四、高嶋英雄さんが、これまで集めた全集や雑誌など約二万点をそつくり出身地の香川県観音寺市立図書館に寄贈した、という記事が新聞の片すみに出ていたのが目についた。二万点というのはすごい量だ。記事によると、高嶋さんが集めた小林作品の中には私家版の『×への手紙』『ランボーリ論』の限定本から『無常と云ふ事』『本居宣長』の初版本も含まれているといふ。作品は高嶋さんの手で一年がかりで整理されたあと、一般に公開されるが、散逸を防ぐため閲覧だけで貸し出しはしない方針という。(三月九日読売新聞)

年も前のことになる。雨の日で、芝生が光っていた。傘を出していただきて、芝生の庭の一隅にある書庫を見せていただいた。『神戸図書ガイド』を作るために伺つたのだが、初めての若僧にも親切にしていただいたのを昨日のように思い出す。すごい蔵書だった。一冊一冊が実際にいねいに保管されていた。長尾さんは、その後西宮市に移られたが、貴重なそのコレクションは、龍谷大学深草図書館にこのほど寄贈になつた、と三月十八日の読売新聞は伝えている。記事によると、寄贈された資料は七五〇〇点で、これまで刊行された社史の九〇パーセントを網羅しているといわれ、東大、一橋大などの社史関係資料を上回る日本一のコレクションと高く評価されている。長尾さんは今までに独力で三冊の蔵書目録を編まれている。寄贈された本は七年後に創立三百五十周年記念事業として建設する企業関係資料センター(仮称)に保存して一般に公開する予定という。

芦屋に在住されていた長尾隆次さんの社史・団体史のコレクションを拝見してお話を聞きしたのは、もう三

戸新聞によると、今大阪で、江戸時代の料理文献から、

\* \* \*

芦屋に在住されていた長尾隆次さんの社史・団体史のコレクションを拝見してお話を聞きしたのは、もう三

戸新聞によると、今大阪で、江戸時代の料理文献から、

文学、食事健康法にいたるまで「食」に関する本をすべて網羅しようという計画が進められている。食文化全般にわたる全国でも珍しい図書館だ。計画の主は大阪市天王寺区の「健康食品株式会社」社長の菊山俊治さんと、大阪市福島区の出版社「高槻文庫」の代表をしている吉積二三男さんの二人。二人は二年前から、健康食をテーマにした季刊誌「食」を編集、出版しているが、参考文献として集めた本が膨大な量になってきたため、昨年春ごろ、図書館にして一般公開することにし、その準備を進めている。すでに七千冊が集まっているが、十年後には五万冊を目標に収集するという。図書館は、菊山さんが所有する大阪市南区高津ビルの三階に設置し、四月からは専門の司書を入れて、目録と索引のカードづくりを始め、今秋開館の予定。おいしい図書館づくりにグルメは注目している。

\* \* \*

四月二日の読売新聞に「盲人用ワードプロセッサー」が開発されたことが出ている。記事によると、開発したのは大阪大学基礎工学部の末田統（おさむ）助手で、盲

ごろ、図書館にして一般公開することにし、その準備を進めている。すでに七千冊が集まっているが、十年後には五万冊を目標に収集するという。図書館は、菊山さんが所有する大阪市南区高津ビルの三階に設置し、四月からは専門の司書を入れて、目録と索引のカードづくりを始め、今秋開館の予定。おいしい図書館づくりにグルメは注目している。

\* \* \*

『紳士録』が民間調査機関・帝国データバンクの手で今秋から来年夏にかけて発行されることになった。既存の紳士録に比べ、掲載される人名は五十万人で、一挙に二一四倍にふくらむ。全国の市町村議会議員や中小企業主まで広く収録して、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国四国・九州と地方毎に刊行されるが、合計の厚さは何と一メートルを超すという。すごいボリュームの『知名人名鑑』になりそうだ。同バンクではさらに「二年後には二百万人の紳士録を出版する」というから、いつたいどんな「紳士」が飛び出すものか、楽しみに待ちたいと思う。（三月二十七日・朝日新聞）

特集は「完全版・神田古書店カタログ」というのだが、特集名に偽りナシ。古書通信社の『古書店地図帳』などよりずつといい。詳細であるばかりでなく、読みませる、見せる。定価四五〇円。

大の読書家で、津名郡津名町生穂一五二三の自宅から図書館までの通勤時間（往復約二時間）と夜三時間読書にあてて年間三百冊を読むとのこと。『図書散歩』は図書館での図書の分類と同じように総記、哲学、歴史、地理から文学まで十分野に分け、一分野で五点から三十点の本を取りあげ、一点について五百一八百字の簡潔な書評と編集者名、出版社名、定価を記している。五十六年五十七年にも同じような本を刊行しており、これで三冊目。本はB5判、五十二ページで二百部を印刷、一部四百円のこと。それにしてもすごいことではないか。

＊ \* \*

「ブックマン」という本の雑誌がなかなか良い。力が入っている。このほど、四号が遅ながらも到着した。

人がキーをたたくと漢字かな交じり文が、健常人が別の装置のキーを押せば点字テープが現れる仕組みになっていて、オフィスや学校すぐ利用できる。処理能力は一分間に約二百字で通常のワープロに劣らない性能という。装置全体は量産すると六十一七十万円になる見込み。盲人のコミュニケーションにとって大きな武器になることは間違いない。

## 郷土誌の窓

川西市大和東

昆虫の宝庫として知られる能勢地方で、昭和四十年から昆虫を採集し続けてきた、川西市の仲田元亮さんが『能勢の昆虫』（全三冊）を自費出版された。二月十九日の朝日新聞にその記事が出ている。記事によると、仲田さんは、四十年の夏ごろから能勢地方の山に入つて昆虫採集をはじめた。しかし、ベッドタウンとなつた同地方は、大型団地が相次いで建設され、丘陵地帯の山林をすみかとしていたカナブンやオオクワガタ、チョウ類のオオムラサキ、ミドリシジミなども激減し、半分以下になつてゐた。十八年がかりで採集した昆虫は三千種以上にのぼり、去年四月、大阪市旭保健所環境課長を定年退職したのを記念して、カブトムシ千三百十二種、チョウ九十四種をまとめ『能勢の昆虫』を出版。本は五〇〇部の限定版で、カブトムシの部が二冊、チョウの部は一冊にまとめ、希望者には三冊組で一万三千円（送料一〇〇円）の実費で販売されている。お申し込みは、兵庫県

奈良漬の老舗、東灘区の高鳴酒類食品が社史『百年のあゆみ』を発行した。同社の創業は明治三年（一八七〇）で、現社長の祖父が粕（かす）取りしようちゅうの醸造などを始め、その後、奈良漬けを手がけた。「甲南漬」の名で広く知られている。社史には明治時代の工場、酒蔵などの写真や、価格表の移り変わり、昭和初期のパンフレット、新聞広告などの資料が盛り込まれている。

（朝日新聞二月二十六日）

\* \* \*

神戸新聞出版センターから、三月に入つて四点の郷土関係の本が出版された。このうち、初めに紹介する三点は共に『のじぎく文庫』の一冊として刊行されたものである。

『神戸の植物化石』（一二〇〇円）は堀治三朗さんの著で、六甲山系から採集された多数の植物化石をいくつかのなかまに分類整理して、初めて化石に触れる人にも

わかるように書かれた本だ。それにしても、この神戸の地層中にこんなにも多種多様な化石が在るとは信じられない。美しい口絵写真や多数の図が理解を助けてくれる。地質学の楽しい読み物として貴重な一冊である。

なお、堀さんは昭和五十一年に『神戸層群産植物化石』（定価六〇〇〇円）を日本地学研究会から発行しておられるが、この本は、もう入手が難しい稀謄本となつてゐる由。中央図書館にもないと室井綽さんの推薦文にある。

『荒木村重と伊丹城』（一〇〇〇円）は伊丹在住の劇作家・香村菊雄さんの著で、戦国の武将・荒木村重に焦点をあてた異色の歴史ドキュメント。信長に重用されたがやがて謀反し、妻女以下一族数百人を慘殺されながらただ一人生きのび、のちに秀吉に仕えて茶人として名をあげた村重の人間像にせまる。後半部分は戯曲「荒木村重の叛乱」を収録している。

『ひょうごの地名』（一一〇〇円）は六甲高校の教諭・吉田茂樹さんの著書で、まさにその書名の示す通り県内各地の地名の由来を叙述した本だ。短い説明の背後に膨大な考証の累積があることを知らなければ、単なる

地名ものしり帖に終つてしまふ。広い兵庫県のことだから主な地名しか収録されていないが、地名への興味をかきたててくれる。

\* \* \*

あと一点は『ワンドフル・コウベによるガイド』（九五〇円）だ。食べどころ、飲みどころのガイドだが、デートポイントや、楽しい酒にまつわる読み物、アンケートなどもあって趣向がこらされている。神戸の夜を楽しむには格好の本といえよう。先ごろ発行された『酒場の絵本』とともに酒を愛する人たちにとって、酒場の案内書として広く利用されることをおすすめしたい。姉妹書に『ひるのガイド』も刊行されている。

\* \* \*

「少年」の四十四号を届けていた。この同人誌は、前号で紹介した通り、老人の文芸誌だが、その中にあるものはアマチュアリズムであり、「反権威」である。今も少年よりも少年らしい心情があふれているピュアな同人誌だ。今号は、佃留雄さんと青山順三さんの追悼号である。若い僕はこのお二人を知らないが、足立巻一さ

んや飯沢匡さん、小島輝正さんなど多くの人たちが故人の思い出に触れておられる。それらが皆とても清々しい。

\* \* \*

兵庫県揖保郡御津町の梅どころを一冊の本にまとめた神戸の元校長先生の記事が二月十六日の神戸新聞に出てる。記事によると、この人は森川進さんで、本は『梅の見える古墳群の丘・御津の梅林』。森川さんは昭和三十五年から四年間、御津中学校の校長先生をしておられたが、その時期に古い歴史を持つ御津町に関心をもち、いろいろ調べられたという。本は美しいカラー写真二ページ、グラビア六ページなどをふくめ百二十六ページ。

御津町の歴史、梅林と古墳群、室津梅林の由来、岩見・綾部山梅林の開拓などを記している。定価は九百五十円で送料は二百円。お求めは左記森川さん宅までお申し込みください。

【神戸市西区玉津町】

(電) [REDACTED]

\* \* \*

芦谷川の渓谷を守る運動をすすめている「北神戸」の自然と文化を守る会が昨年9月に開いたシンポジウムの講演内容を冊子にまとめた、との記事をスクランプの中から見つけた。記事は二月二日の朝日新聞。だいぶ遅れてしまつたけれど紹介します。冊子は「82.9.23.シンポジウム芦谷川報告集」で一〇〇〇部をつくり、希望者には六百円で分けている。神戸市が芦谷川を廃棄物埋め立て地にしようとしていることに反対して開いたシンポジウムの記録だ。冊子は大学ノート大三十六ページ。お申し込みは、神戸市北区甲榮台 [REDACTED] まで。電話は [REDACTED] まで。

\* \* \*

神戸空襲を記録する会事務局長の君本昌久さんが、空襲の記録をまとめた本を三省堂書店から出版。三月十九日に当店で発行を記念してサイン会を開催した。本は神戸の色街・福原での戦争と空襲の惨状を記録したもので、三年半の年月をかけて取材したもの。書名は『いろまち燃えた—福原遊廓戦災ノートー』(一〇〇〇円)。三十八年前の福原の街が浮き彫りになつていて。

【神戸市西区玉津町】

(電) [REDACTED]

\* \* \*

『谷崎潤一郎の阪神時代』という本が西宮市の市居嘉雄さんの手で出版されている。この本は、谷崎潤一郎が仮住まいの西宮市苦楽園の旅館から筆をおこし、引っ越した順に十三カ所の住居、環境、交友関係などを各種文献を引用したり、ルポ風につづっている。旧居の見取り図や周辺の略図のほか、旧居のあった正確な地名、地番などを徹底して調べた実証的な研究書となつていて。本はA5版で二百二十八ページ。二〇〇〇部を印刷して頃値は二〇〇〇円。入手ご希望の方は、西宮市霞町 [REDACTED] ままでお申し込みください。

\* \* \*

朝日・毎日・神戸の各新聞に第五管区海上保安本部に海上保安の資料室が開設されたことが出ている。海の安全を守るために道具や機械類約百点をあつめたミニ博物館で、市民に無料開放している。見学希望者は五管本部総務課(電話 [REDACTED])へお問い合わせください。

\* \* \*

明治から戦前にかけて兵庫県下の小学校の運動会で歌い継がれた「運動会行進曲」が一冊の本によみがえった。三月二十五日の神戸新聞にその紹介記事が出ている。

本はその名の通り『兵庫県運動会行進曲』で、まとめた

のは朝来郡の元香呂駅長北垣省二さん。「運動会行進曲」はほぼ同じようなメロディーに、それぞれの学校が、土

『兵庫ふるさと散歩』の十冊目が四月に入つて発売された。タイトルは『ひょうご歴史のみち』(九〇〇円)で、兵庫県内の文化遺産を紹介した。歴史の手引書だ。

県内を五つの地域に分けて、五十のコースを設定、旅案内をした本で、兵庫県教育委員会の編集になる。

\* \* \*

(電)

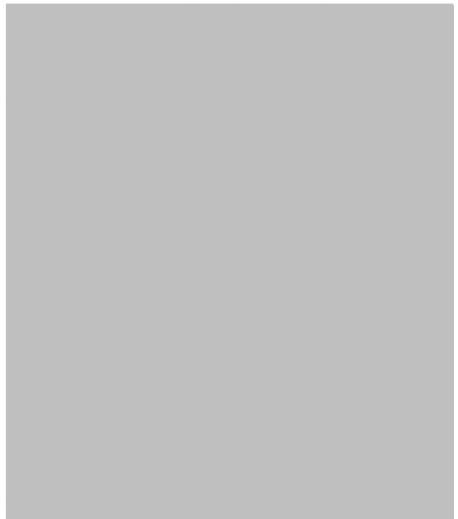
雑誌「歴史と神戸」(一一七号)が届いた。今号の特集は「神戸居留地と在留外国人」。天野健次さんが書いておられる。この論文と、六甲山の地名論を展開した鏡味明克「六甲山は向うの山ではない」が収載されている。当店郷土の本コーナーでご覧ください。

\* \* \*

映画の本を集めた「シネ書誌館」が三月に開館した。

さき頃、案内状をいただいたので紹介しよう。案内状によると、蔵書は大正・昭和初期から最近発売になった本まで約一〇〇〇冊、雑誌は五〇種類三〇〇〇冊、映画台本約一二〇冊を收藏しているという。他に、未整理ながらポスター・スチール・プレスシート・パンフレットもあるとのこと。開館は朝九時から夕方六時までで、入场料は無料、自由に閲覧できる。神戸の映画ファンには大きな朗報といえそうだ。所在地は次の通りです。

〒六五四 神戸市須磨区友が丘



映画図書資料室 シネ書誌館

## 海文堂案内板

たコーナーに移しました。

⑤ ノンフィクションの作家別のコーナー(ニュージャーナリズムコーナー)は人文書ゾーン内に移動して、現在整備中です。

⑥ 元ニュージャーナリズム・コーナーは五月から映画・演劇・音楽・タレント本などのコーナーに模様替えをいたします。

⑦ 社会問題に関する本は△政治▽に統合して、政治のワクをぐっと広げることにしました。△政治▽のコーナーは一階奥の西側にございます。

その他、細い移動はありますが、詳細は店員にお問い合わせください。これからもお客様にとって本を探しやすいように工夫をしていくつもりです。棚の標示もまだ充分ではありませんが、探しやすい分類と棚表示に取り組んでまいります。

★ 春をむかえて、店内の本の移動をおこないましたのでご案内いたします。

① 二階のコミックコーナーを一階児童書ゾーン内に移しました。

② 二階のコミックコーナーには、教育書の専門図書を陳列することになりました。学習参考書と隣接したコーナーです。保育図書や家庭教育関係の本は一階にそのまま陳列しています。

③ 岩波書店の発行図書は、前に資格試験・就職試験の本を展示していたコーナーに移動しました。

④ 資格・就職試験の本は、前に教育書を展示してい

下さい。そのあと、十六日から月末までは「時・TIME・TEMPLE」と名付けて時間の使い方や活用法など、はばひろく「時」をテーマにした本を集めた

ブックフェアをおこないます。

わったフェアをおこなっています。「心理トリック&テクノロジー」というフェアです。人の心に興味のある方はお立ち寄りください。

★ 二階ギャラリーでは、四月二十五日から五月三日まで「フランス・スペイン新作絵画展」を開催します。美しい色彩の世界をご覧いただきたく思います。その後と続いて、五月四日から十五日まで「銅版画の詩人・戸村茂樹新作銅版画展」を計画しています。新鮮な芸術の世界にお立ち寄りください。六月に入りますと、四日から十七日まで「便利堂フェア・国宝・重文ミニチュア展」を予定しています。楽しい企画が次々と登場します。

★ 文庫ゾーンでは「吉川英治フェア」と「赤川次郎フェア」を開催中で、ともに五月中旬までの予定です。若い人に読まれている赤川次郎の作品と、幅広い読者をもつ吉川作品を文庫本で可能なかぎり集めてみました。

★ 新書ゾーンでは、多湖輝さんの著書を集めて一風変